グループ名：早いメロス（仮）

クラス：M2A　学籍番号：16s21015 氏名：熊谷　洸介

論文要約 （８００―１６００文字　MAX 2000）

1. 論文名

　玉瀬 耕治・富平 美智子(2007), 大学生の「甘え」と友人関係, 帝塚山大学心理福祉学部紀要 3, 59-72.

1. 問題と目的
   * なぜこの調査をしようと思うのかといった現状の問題と，調査の目的・仮説を書きます。

現状の問題

大学生の対人関係を考える上で、「甘え」の問題を取り上げることは発達心理学的てきにも臨床心理学的にも興味深いものがある。土居(1971)が「甘え」の概念を提起して以来、国内外の研究者の間で「甘え」をめぐるさまざまな議論が展開されてきた。土居(1971)は、「甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとする」と述べている。土居(2001)はその後、「甘えとは、人間関係において相手の行為を当てにして振る舞うことである」を再定義している。筆者らは、大学生における「甘え」について探求し、他社に対して甘えを求める（甘え欲求）と同時に他者からの甘えを受け入れようとする（甘え受容）ような｛相互依存的な甘え｝をより好ましい甘えとみなし、実証的にそのことを示してきた。

次に、人間関係の親密仮定に置いて重要視されるものに、友人の役割行動遂行が挙げられる。役割遂行について、下斗米(2000)は、自分が友人に期待している役割行動を友人が遂行してくれていると認知する時、両者の関係は安定して親密化が進むと考えた。

次に、良好な友人関係を構築する際のもう一つの要因として、自己受容の役割について考えてみたい。自己受容とは、ありのままの自分を受け入れることであり、心理学的健康の指標の一つとみなされている。自己受容が高い人は、たしゃにたいして

信頼や愛情を持った態度を取ることが出来る。また、他者と対立したり、他者に依存したりしない。さらに対人場面においてあまり孤独感を感じていない。板津(1994)

さらに、自己受容と親密に関連するものとしての友人の受容観についても取り上げてみたい。大出・澤田(1998)は、自己受容を高めるためには、重要な他者からのサポートを受け、自分を重要な他者の何らかの役に立っているという意識が必要であると考えている。したがって、自己受容が高まるためには、友人からの受容感を感じることが必要であり、その結果としての自己受容を媒介として、良好な対人関係がこうちくされる可能性がある。

以上の研究動向をふまえ、「甘え」と青年期の良好な友人関係との関連について検討する。

仮説

本研究では、概ね次のような過程をへて良好な友人関係は形成されると仮定した。

「相互依存的な甘え」→「友人の役割行動遂行」→「友人からの受容感」→「自己受容」→「良好な友人関係」。本研究では、このような過程を想定することがかのうであるかを検討した。

1. 方法
   * 対象者と調査項目を書いておきましょう。
2. 結果
   * 目的と仮説に対して，どのような結果が得られたのか（仮説は支持されたのか，支持されなかったのか。また，どのようなことが明らかとなったのかなど）を書きます。
3. 考察
   * なぜ上記のような結果が得られたのかや，研究の発展性・今後の課題を書きます。